



ソン・ジョンウ●韓国の漫画コラムニスト、漫画企画会社代表。1995年から韓国で日本の漫画・アニメ事情を紹介。編集者や漫画賞の審査なども務める。2002年からは日本でも『読売新聞』などで韓国サブカルチャーのコラムを日本語で発表中

知られざる 日韓合作プロジェクト

文化開放政策の前から
始まるアニメの交流

最近、日本で流行った言葉に「韓流」がある。ドラマを中心に音楽や映画など韓国の文化が日本でブームになった現象を示す言葉だ。

では、逆に韓国で日本文化はどう見られていたのだろうか。日本では韓国政府が1998年以降、4次にわたって実施した「日本文化開放政策」*のインパクトが強かったためか、それまでの韓国で日本文化が完全に禁止されていたように思う人が少なくないようだ。だが、この開放政策は、あくまでそれまで開放されていなかった分野の開放という意味である。その前から何の問題もなく自由に輸入されていた分野も多いのだ。例えば、テレビアニメーションがそうだし、マンガや小説も少なくとも90年代にはすでに、いろいろな作品の韓国語版が出版されていた。

80年代末に翻訳された村上春樹の『ノルウェイの森』のように韓国で大ヒットした作品も多い。特にここ数年、韓国での日本小説の人気は大変高く、韓流に因んで「日流」という言葉がマスコミに登場するほどである。

また、昔から日本で発売された書籍・音盤の輸入購入もできたし、それを通して交流は少なからず存在していた。だがやはり、そのなかでも極めて初期に輸入を始め、その後、政策的に交流が進められて韓国の文化にも大きな影響を与えた分野はアニメーション、特に「テレビアニメ」である。

日韓合作だった 名作アニメーション

韓国のテレビでは60年代末から実に40年近くも日本のアニメーションが放映されてきた。そのきっかけは60年代末の『黄金バット』および『妖怪人間ベム』である。この二つの作品は日本

の広告会社の第一企画（99年に旭通信社と合併し、現在はアサツーディ・ケイ）と韓国の民営放送局の東洋放送（80年の「言論統廃合」により、韓国放送公社「KBS」に統合された）が合作で製作したものだ。

両社は合作にあたり65年に共同出資でアニメ製作プロダクションを韓国に設立。作画監督の森川信英氏を筆頭に日本人スタッフをソウルに派遣して韓国側のアニメーターを育成しながらこれらの作品をつくった。もちろん韓国でも50年代末からアニメーション製作が始まっていたものの、劇場向けばかりでテレビアニメの製作経験はほとんどなかった。

特にここで注目すべきはこの東洋放送が韓国の新聞社「中央日報」の系列社で、当時社長だった洪璣基氏は51〜53年まで日韓国交正常化交渉の第一次から第三次会談の韓国側代表の一人だったという点だ。洪氏はその後、韓国

*第3次日本文化開放政策（2000年6月27日）で、国際映画祭で受賞した劇場用アニメが映画館で上映、ビデオ販売可能に。劇場用アニメがすべて開放になったのは今年から

政府で法務部、内務部長官等を経て、日韓基本条約が調印された65年に東洋放送社長として就任した。

当時、東洋放送に派遣されていた森川氏の証言によると、この日韓のアニメーション合作には日本側も最初は洪氏からみて積極的だったし、韓国側は洪氏が大きく関与していたと言う。またその辺の研究が進められていないので断定はできないが、2001年から森川氏へのインタビューなどを通じてこの問題を調べてきた筆者の推測では、おそらく『黄金バット』『妖怪人間ベム』の日韓合作は日韓基本条約締結と関連し、日韓の文化交流政策の一環として進められていたのではないかと思われる。

だがその文化交流政策は、その後、日韓双方の政治的な立場の変化によってだんだん薄れていったようだ。日本側も韓国側もそれぞれ消極的になり、結局、日本のスタッフは全員帰国してしまつたと言う。この合作プロジェクトを進めていた人たちはその代わり、日本で製作する作品の動画作業だけを韓国にまかせる、いわゆる「下請け」のシステムをつくるようになる。最初は日韓が協力して世界市場を狙おうという大きなプロジェクトだったはずが、

結局は当時の韓国の安い人件費に頼りアニメ製作予算を抑えるためだけの単純なものになってしまったのである。

『冬のソナタ』に影響を与えた日本のアニメ

だが、この合作プロジェクトのお陰で、韓国のテレビでの日本アニメーション放映は60年代末からほぼ自由になり、多くの日本アニメーションが韓国でも人気を得るようになったのは事実である。特にこれらの日本アニメーションは、日本とはまたちよつと違う評価を受ける場合も少なくなつた。同じ作品でも、韓国では韓国なりの受け入れ方があつたということである。例えば、日本のアニメーションのなかで韓国で大ヒットした作品は、『キャンディ・キャンディ』『銀河鉄道999』

『未来少年コナン』などであるが、その人気の特徴は男女問わず支持されたという点にある。

また、韓国でヒットしたこれらの日本アニメーションを見て育つた人たちが、その作品からの影響を自分なりに解釈して新しい作品を創作する動きも出る。韓流ドラマの代表作『冬のソナタ』もその一例だと言われている。

『冬のソナタ』の脚本を書いたキム・ウニ、ユン・ウンギョン両氏は、子供のころに見ていた『キャンディ・キャンディ』からメロドラマの原型を見たと言っている(「週刊新潮」2004年8月12・19日号)。言うならば、日本のテレビアニメが韓国のドラマに影響を与え、またその韓国ドラマが日本に入つて韓流ブームを起こしたのである。

その日本アニメーションにはアメリカからの影響があつたと言われている。アメリカのアニメーションにはまた、ほかの文化からの影響が存在している。『冬のソナタ』やそのほかの韓流ドラマ、映画などもこれから日本の文化に何らかの影響を与えていくだろう。まさにこれこそ「文化の交流」なのではなからうか。

日本と韓国の両国間は、政治的には日韓基本条約のころから今まで大きな変化があつたようには見えない。だが、その裏には『黄金バット』や『妖怪人間ベム』、『キャンディ・キャンディ』や『冬のソナタ』などの作品を通じて、日韓の文化交流は長く緩やかに、だが確実に進んできた。これからもそうした形で交流が続けられることを願うばかりである。

(原文は日本語)

『キャンディ・キャンディ』
原作・水木杏子、原画・いがらしゆみこのマンガをもとにしたテレビアニメ。76、78年放映。20世紀初頭のアメリカ中西部およびイギリスを舞台に、孤児の少女が周囲の人々に支えられ成長していく姿を描く。「白馬の王子様」の登場、出生の秘密など、現在流行の韓国ドラマとの共通点も多い。

『未来少年コナン』
宮崎駿監督のテレビアニメ。1978年放映。第3次世界大戦後、生き残った人類が住む島々を舞台にした、コナンと少女ラナの冒険の物語。